

大槻文彦講演筆記一

写本

洋学文庫
文庫8
A 308
1



<43-7209(13A)>



明治三十二年

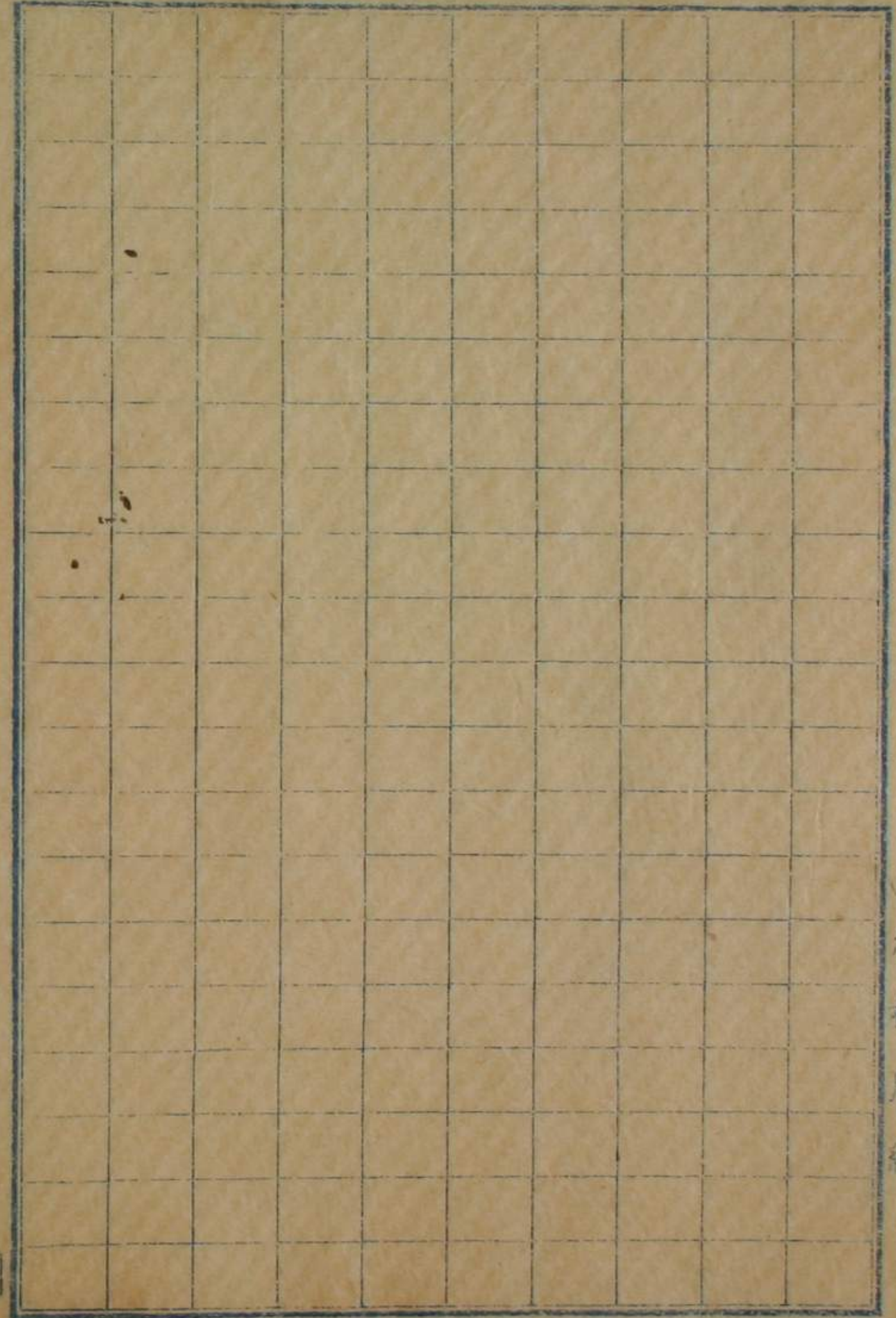
心身之土野其言較譯外編

大觀抄上

大槻博士

日本方言の分布區域に就て

校長の小林先生が、お世にあり、
 語を、
 も、
 物に就ての語の、
 殊に、



方に對しんのどうも話と云ふやうな材料は有
 って居るぬ。テお断りをしてたえり。ぬいも宜
 しくあら話しん是れ多と云ふお話であつて。一
 下今日の日は本方言の分布區域に就くと云ふ
 題を。どうも小さな女學堂の方に以當るをま



[]

りのお話をあるけぬぬ。夫れも直ぐある
 と云ふ御注文である。お先が一つお吐きし
 見やうと思ひしやう。夫れは面白と思つては
 伏が違ふ。又分るぬもあるか知らぬかア
 其積りてすん強さをぬ。夫れはアサタ方

も学校で学んだ作文……文章論、作文論
 の平生話をやる。詞と文連なり、日本には文章論
 と呼し詞と一通りある。夫れはア、アアア
 行ひあるものと云ふに、世の中が開け始つた時
 に單に話がありしをだ文章が無し、文章が出



()

来てから其話を文字に書ける。其時には話し
 詞より詞が精らう道理があり、ソコで話を去
 りしに依つて強々に極つて愛つて往くもの
 ある。夫れは話が愛れは文章も愛らるやいな
 ありぬ、夫れは皆しり存はさるやありぬ、今

から千二三年前大和奈良に都あり左付
 書り左書物、其の後山城の京都で書り左書物
 左見ると文章の書き方が違つて居る、史記は
 話如変るから文章も変つて居る、總て其の
 風下あり左、京都の都が盛んか改元年ありん



()

之百年あり前後三條天皇様の時あり史記を
 誦むと字ありに執ん、史記ありは歌と字
 もの所、人の生れ付の智慧と、そのあり能
 く韻を結ると字あり、字能て上り下りあり
 左か、後三條天皇様の時あり師匠と云ふもの

か出来て、葉辭道に入門して教へて書つて歌
を詠むと云ふ事か起つて来たり、其強う文章も
其通う事あつて師匠に就く事おと云ふやうな
風習にあつて居り左、ソコデ文章と云ふもの
は一口固まりて仕舞つたものもあつて、話と



廣瀬用細

()

今よりのは世の中が假々進歩に往つて新體文
つて行く、ソコデ話と文章と二通りにあつた
、元來の文章は學校の教育を始終教へて居り
たあり之はヤヤと輕つて居りて變りあり、
話と云ふものは年二三年三四年と過さるる旨

には始終愛つて行く。元來も先づ七八百年も
 強うた吟句にあつて見ると、口ずかす半人の口
 へ吐き出すところの語がどうも大層違つて居る。
 九節の人と奥節の人とは語が全然異なる。でも
 ア長崎の「ヨカバツケン」、奥節の「ヨカバツケン」



()

、「どうも分らぬ。比喩も能本の書生が逢半
 七 ~~七~~ 人力車夫に、世ごとく「若く行かば
 高也ろ。値段は成らぬ」と、物が高しと云
 ふるを言つた。これに其書生が「ソウキンニ
 ヤクシニヤスツケンキヨウシテハツケクハイ

と言つたら、車夫がどうか且那日卒の詞は係
 一押して下さしと言つたが、それ係リンニヤ
 しくと言ふのは、さう思はれる位さう、スツケ
 ンキ日ツシテ、又は片足は歩くと云ふ、東京の
 小僧が能くケンしくモかしくと言ふのがスツ



()

ケンキ日ツシテハツチクワイ、さうも日卒の
 詞は思はれまゝ、併しケンしくモかしくと
 言ふのも日卒の詞らしくまゝ、さうさふ風に
 言ふ言取れまゝのやうな詞と云ふものがある所
 に有る、それ斯うさふ風に日卒の卒の詞が

尾に在るをとちよのほらさるちよるが基也と
ちよと色とある中に其も大なるは徳川
家の頃に其名とちよものかありし、日本馬車
に在る者十餘大名とちよものかありし、其止
地も人民も自分のものとしし、極分境を固めし



()

居るを、その地其地と其外と往還を
るのには非常に不便とありし、西境には國所を
指して、若島と人を通さしやとありしが、其
山一ツ川一ツ隔りて居ると、風俗も異り朝も
異なる、是れが、一一般の基也ありし、斯く云ふ

用にあつて来た、その文章詞の方は普通
 校で教へるからヤヤと一本格の左筋は
 来る、その詞とあるものはトと格と
 の變つて来た、その日年の玉詞とあるもの
 は、文章詞は玉詞に ~~あり~~ 出し詞は玉詞



にはある、之が日年の玉詞にあらまは
 多し、その端造りて居る、その文章の詞
 にも文章の詞にも、其の地の記りがある、土
 地の記りがあつて、其の年のふの詞と、話し詞
 は、言ふ能はりにあつた、その文章と話と詞が

連子に依つて近頃言文一致と言ひて話と文章
 とを一致にする。同じやうにする也。其論が
 世の中に出る左、話を文章に書くは其れを自
 本の文章と爲し、又其の中、何れも皆話を同
 一やうにしやうと云ふ論が起りて来りぬりと



()

学者が調子で強ひて居る、ソコで日本文学の
 詞使いも今では凡そ話をしやうと思ふ、其
 之も本意に多調子は何かの未だ不十分であ
 る、少調子に話をせよと申す一付言やに
 此言は其れと話しきれぬ、それ下確に

居る。備し之は思ふ舞ふ悦ぶ。言由方お多し。の
 下り。ア金もを調へて見させ。一。その物
 を裏返しに言ふ。「~~讀む~~と書ふのを讀むと云ふ」。
 見ると書ふのを見よ。」「~~買ふ~~と書ふのを買ふ
 あり。之を文法の上で打消し、打消しん買ふ



()

去る。其打消した付らるるに東京ありては
 買は去る。買は去る。ノ買は去る
 けれと使ひて居る。之が右の方にあると「買
 は去。買は去。買は去けぬ」。「おぬ」と使ひ
 て居る。文章と詞と同じ也。
「おぬ、おぬ、」
 買は去る。

〇「な」屋く話詞「ある、これに「行かまら」と言
 りの老「行かた、行かまら」る扱はそれと少し
 も違はまらぬやある、之も斯うや風に使は
 れたやうして「た」と言ふに、程く古い十二
 三百年前の書物に「あ」の詞にあらた、歌を



()

詠人の集まのたる思集とや書物に「行かたを
 行かまら、行かまら」と使つて、古くから東
 の方にあつて之が變つて来たのをとらうと思ふ
 併し文「覚くまら、覚へまら」と使ふは
 が文章詞である、それと扱ひをあらうと思

六
 語
 用
 氏

あつて、之が東の「ま、ふく、あやれ」之が
 西の「おぬゆ」とまわして凡そさうさう境ひあ
 る、そあから人に物を言ひつづるの比「左
 ろ、見ろ、受けろ」「ろ」を使ふ、西より「
 左よ、見よ、受けよ」「文章詞下、そあから



原稿用紙

()

「左てい、見い、受けい」「よ」と交りて使
 つて「ろ」と言ふのは東の方を「ろ」と言ふ
 詞のいろなふくまひ起つたか知らぬが、之は
 西の集と云ふ書物に東のよの西詞の歌を詠ん
 だのに「あやろ、せろ、ゆせろ、せのろも」

原稿用紙

七字のヤリに、女も男のむを「~~あ~~」
 也「~~あ~~」に「也」を付ける、山のむを「つく
 ばあ」ぬにるを付けて「ゆき」
 左に「つけろ、せろ」
 と今もやうな風に使はるゝのが、
 穢に穢に見くる



()

之由其末はありのヤリをあるけぬも飛ん
 下りてきたものか知るゆゑ、九段の肥前と肥
 後に比「ろ」がある「たろ、見ろ、受けろ
 在るよ、見よ、受けよ、たよ、見よ、受
 けよ」比「ろ」と言ふ詞は口語的なびり、そ

京語
 月
 氏

「来き」のを「来い」之は古紙の筆堂に同じ
 下、まきか束の旁にも「ろ」は付けある、所
 にお羽田亀田と云ふ所は「ころ」を付ける、
 着物を着ろ、相あしろと云ふに孰くは可笑く
 あらが「ころ」と云ふの付らと少し可笑い



「さうき」の「さう」は「さうき」の「さう」
 「こつちへ来たり」とある、丸印の字は「ら」
 「こつちへけい」とも書ぶ、
 「これあり」とある、其を「し」の字は「
 さうしよ、さうせよ、しやう、せよ」と也

大三通りに言ふ、三が丹波あり、~~丹波~~山にあり
 たり、行くと「する、する」と随分詞が重なり
 へ来る、比「と」とまゝのを踏へ付けるの取信
 濃越後より東佐後の方へ「よ、い」は西に東
 つて居る、元小倉ら今申し右通り丸居のすく



丹波
 山にあり

()

行つて肥前と肥後に「つ」がある、さうさう
 層に飛んといつた方に「つ」連つた詞があるの
 は、さうな事候かと書ふに「つ」も能く分るゝ
 けいども、昔の大名に足利とさういふかまゝに
 大若に懸分を善化するのに「つ」を考へるがある、

丹波
 山にあり

大分方面に東の方の大名が行つて、其大名が
 移る時には必ず先づ東へ先づ西へ行くか
 ら詞も移る、肥前肥後あたりは、肥前の
 唐津には少監原と今ふ大名がある、豊原には
 松平と今ふ大名がある、筑後の久留米は、
 川



()

は一変東へ移る左に、久留米の田平
 と今ふ大名は東の方の大名を居る左に
 いる、今ふ大名の、先には角東へ使は左に
 言ひ付ける詞の下に「了」を付けるが、
 といふ所の肥後、肥前には、それより「了」

を書く」と言ふるを「書き」
 研をさきへ」を
 「研をさきへ」
 研をさきへ、さきへが「り」に
 移つて「あり」
 「東京にも使ふ、日
 本全書書かす、さきへ」と言ふて
 展る、その水か
 ら「東をさきへ行く」と言ふ
 「山を崩してさきへ」



()

る、さして、さきへ、
 懐るから物をさきへ
 之を「さきへ、さきへ、
 たり」
 「し」を
 「し」と言ふ、
 文は漢字ハ
 多と南島の
 語に類後佐
 後とさきへ
 方南の東は「し」と言ひ、
 其水あり
 西は「し」を「し」と言ふ、
 東をさきへ行く

六
 三
 五
 氏

を買ふを「買ひて」「焼いて」「買ひて」と文章
 に使ふを「焼いて買ひて」と語めて言ふのは東
 の方の詞とありて、西の方へ行くと「焼いて
 物を買ひて」「延く言ふ、此焼いて買ひ
 へ」と言ふ語の詞と言ふものは、之は少く廣く



()

ありて美濃辰越飛彈越後佐橋、之が境にあり
 へ居る、之れから西は「焼いて、買ひて」
 と言ふのを極うん、物を人に殺むるを「左の
 へ」「か」ありて「に殺りて」「死」とは
 る、之は東の方は「ん」と言ふ居る、此が

辰越
 佐橋
 飛彈
 美濃

焼しうて、能うてしと延と行く、此處別は
 在江信濃越後佐橋、車がく下ありて之れ
 あり西はつうてしにありて居る、花も車は
 直しうてざりまう、古早くと歸りままゝい、有
 難うてざりまう、と言ふは能く使ふ、大楯



()

下に「おざりままゝ」お歸りままゝ、と言
 ふのは、故多時に大抵使ふ、之は言ふ通りの信濃
 在江越後佐橋を境に西と東に別れ居る、そ
 れありし、朝早く起きる、花が満ちる、文
 章詞心、起き、起る、起る、満ち、満ちる

京橋用紙

うき世にまゐりて未來の未來の詞の境が展々
 にまゐりて展々、そのまゐりしは未來まゐりと
 しろの未來の心を詞に「うけず」と言ふ
 のがある、まゐりしは「いああ、いああ」
 行かまゐりのまゐりと思ふと行くの尤、之を文章の



〔 〕

「行かんかものを」まゐりの「行かん」と言ふ
 のが「いああ」とまゐりしを語つて言ふ
 のを打消すとまゐりの「あ」はあ、矢張り
 未來の未來の時を言ふ詞である、そのまゐりし
 て丸のまゐり「つろ、言ふつろ、行きつろ

人「むき」詞がある、之は其三何也か「つと
 言ッつら、呼んつら」東の方を未来の詞に「
 ヲ」行くバ、おにしヤ」「バ」と成ぬ
 リ言ふ又「バ」と言ふ所もある、漢字と出
 羽重多を以て伊三つとと臨海の方のまゝに



比「バ」が残つて居る、文章にある「バ」
 の詞のまゝに在りて、何れも未来のまゝに
 何れも言ふ所でありませぬ、それの物を言ひませぬ
 へ極めつ詞、月だ、花だ、比「だ」と言ふ詞
 は西の、花とや、月とや「だ」と「ら」と「さ」

原稿用紙

ふ、此等()と云ふものは、昔江信濃勤後の事か
 ()左、佐治の玉は()し中()にありて居る、それ
 江右の事は()し中()にありて居る、其の中には大分遠り
 居る所もある、名古屋へ行くと()し中()にありて居る
 事、こゝろである()京都大阪は()し中()にありて居る、こ



()

うぢや()と云ふ、その外は()し中()にありて居る、
 ()と云ふ、少し町等は()し中()にありて居る、
 ()と云ふ、これは京都()し中()にありて居る、
 ()と云ふ、こゝろである()大阪は()し中()にありて居る、
 ()と云ふ、こゝろである()上方の方()し中()にありて居る、

ていすしとよきうまう、之は語の古詞である
あまの輪詞にまかりて居る、比(ひ)と云ふ詞
に就ては、此は娼婦人に遇ふ處に語をまゐる、此
難お前(まへ)トシと無の詞で、侍りは勿論、身
分のあまの竹人(たけびと)まゐる法し、使はあま(あま)と云ふ



()

ま、ていすしと云ふ詞
は、此難お前(まへ)は、藝人の詞である、藝人か或は昔
原の茶屋女かぬわい、使は古詞である、昔あまの
茶屋女か、まゐるにまゐりてあり、前の家の女房にま
ゐると比(ひ)と云ふ詞がある、まゐりて始(はじめ)に言をま

所
精
用
紙

やうきものか「ひや」詞を使ふやうにあらた
之は「ア」物とも自分自身に「あ」羅新の詞使
りは知つて居る、之を「さうひや」と言ふ
「さうひや」と言ふ「さうひや」と言ふ詞の同じ
やうにあらる、此詞を止めさせたりと思ふか



()

中々斯うき風は廣まわつて止む止むせざる
はあまきまの、さう言ふ物も使ひ居る、其強
り任ふかあら「ひや」詞はさうき子詞の起り
下ある、そのを能く知り居るたう置あらう
と思ふ、そのを能く知り居るたう置あり


事すが比位にしん置きませう。その心分申し
 左邊割の中心も通事の部分心西の詞を解りし處も
 使つて居る所もあり。これ別けると今所註
 ちしを申う。赤紙を、つる色と出たり。蓋入心
 たりしと居るけれども、此處と西と別りし能



{ }

の大柱みの境とす。そのよき江信濃越後之
 ちら東を、西とす。その休れえ比境である。
 西を東とす。此等には大層が向いし加ありし東と
 西の境界は遠らぬと居る。ちら自かす斯うさふ
 境が素直のたらしと思ふ。テ此の詞は其の

東
 西
 南
 北

らぬとあつことを「ついでに」を「ついでに」
 のはがみせ、へうし「とまふを」ついでに
 流の光る虫を「ほたる」を「ほたる」梅の甲の
 「ししめ」を「ししめ」歌の「さくら」


を「ちきり」歌の「ほたる」のこを「か
 ほかの「たぬき」のこを「たぬき」野菜の「
 え」のこを「ちえ」に「いん」のこを「いん
 外に「のたぬき」のこを「たぬき」か
 「いん」を「いん」かの様を「ゆあ」を「いん」
 11

原
和
月
紙

ちらう「ことごと」
 「とまひ」
 「かみそりひをを
 剃るから」
 「かみそり」
 「ひあるの他」
 「かみそり」
 芝居を見るるを「しんやを見る」
 「左右南世を
 知る」
 「かみそり」
 「を」
 「世」
 「かみそり」
 「えぬから女
 鬼のやうあのを」
 「鬼」
 「に物」
 「と書あのを」



()

中んぢや「七福神の中」
 「あつろくじゆ」を
 「ほろろくじゆ」
 「を少すは」
 「と書あのを」
 「えぬから」
 「さうでさくじゆ」
 「女学生が能く使ふか
 ちんてま」
 「之は誇り能くあつ、
 市羅お前」

六
五
出

の徳川徳本の女の詞と女子もの領域に美らし
 い奇麗な詞であった。今の女の詞は随分多を
 送りぬ品が悪くあるワも、以唐詞書
 年詞は女と云ふ儂り使はるやうにするの如
 自分の品を保つには年りりもある、マア



()

斯うな風を東京詞の流りと女子ものも無限
 りもある都の詞と云ふは随分趣しの詞が山
 あり、それありしと同じ詞の意味の分りあ
 のか、いらつしやる、あつてあつてと言ふ
 詞がある、いらつしやるは其場に居

詞の流
 詞の流
 詞の流

3 行りのを 1 いきやける 4 やとと 庵別が
 付して居る、東京詞は餘程考つものだ、ワコ
 び文章詞と書ふもの休極つて居るから之を白
 本の正詞とするは出来るか、此し詞は皆土
 地くの詠りかありて、尤も古い詞が 1 つ土



()

地に残つて居るものも其の地をりて見れば一
 今あり詠りて見たり此のあたりに、ワコビの
 西中の詞を皆残さず一ツに一ツの何故の人の
 遇つてあるに話の分るやうにしやうと言ふの
 其詞も何故の詞を採つて宜しか分後編にあ

つて唐の、所が用言詞は様々なる所あるあり
 此の都の詞である、都の詞と言ふは今日を
 は東京が都である、今の京都も千年來の都で
 あり、東京京都両方に都がある、此の氏と
 竹の詞を採らざるは公ある、とつて採



()

うまけのふあるの、東京、京都の詞と言ふ
 ものの確はしむ女に直りのものが男に何
 うも弱くしてあり、西京詞には上り下がりか
 次山ある、申さば東京は、比る所あり、三
 錢五厘、斯う一本筋の言ふ、上方は不自由だ



114
3-